Akita University

懐旧談

森川幾太郎氏の訃報に接して…，思い出されるままに

（2017 年 12 月 14 日　受理）

兵庫教育大学名誉教授　　板　垣　芳　雄

平成２９年１１月３日，名古屋市で開催の日本数学教育史学会に出席，第１７回目の総会，そして研究発表会。ということは，学会発足からもう１７年が経ったのか。

午後２：００から，講演と研究発表，終了したのは６：３０頃だった。会場は高いビルの１２階の一室，その建物から出て懇親会の店に向かう道で，桜井惠子さん（小田原短期大学）から，森川先生が亡くなられました・・・と教えられた。聞けば，わずか２週間前のこと，強い風雨のときの連絡だったと言う。

金曜日の夜の，名古屋駅前の雑踏のなか，前を行く若い会員の背中を追い，信号で大通りを横断したら，別の人たちと別の話になった。

翌日，１０：００前にホテルを出て，近くの白川公園内の名古屋市美術館に行く。さらに，大須観音へと歩くうち，森川さんがいつもおられた研究発表会の，東北数学教育学会の年月が脳裏に去来した。わたしには弘前市での発表会が最後になっている。

森川先生は脳梗塞で入院されたことがありました，とも，桜井さんは話した。近年のことだったのであろう。

仙台に戻ったら，本学会・事務局から「第４９回年会」案内の郵便が届いていた。亡くなられたのは，１０月１９日と知る。

強い風雨といえば，２１日に台風が本州に接近，翌２２日（日）の大阪～仙台間の空の便は全てストップした。あれは，夜の便で娘が大阪へ帰る予定にしていて，法事の土地から仙台駅まで車で急ぐこと２時間余り，幸い新幹線の指定券を得て帰宅できた日であった。

桜井さんの言ったひどい雨嵐というのは，森川さんの訃報が伝えられた日ではなく，通夜・葬儀のときのことで，週末の東京だったのだろうか。

弘前市

逝去を伝える総会・案内には，本学会の，ここ１２年間の研究会・開催地が記されていた。２０１３年の年会は東北女子大学とある。弘前市である。この日，新青森駅からの帰りの新幹線の時刻は森川さんと同じで，東北女子大学からＪＲ駅までのバス，その弘前駅からの列車と一緒だった。

新青森駅で別れたとき，わたしは，翌年の初夏にはまた会うような気持でいたと思う。

今年は２０１７年，あの日から４年になると数える。

一方で，年会の開催地が，第３９回，４１回，４３回，そして，２０１３年の第４５回と東北女子大学だったことに目が行く。

一瞬，４回も弘前に行ったとは信じられないような気がしたが，そのうち，年会の前日に弘前市の南部，大鰐温泉に泊まったことが２回，･･･と思い出された。朝の温泉駅から，一度は路線バスで，一度は下りの夜行寝台特急で弘前駅に向かった。

市街地のビジネスホテルにチェックインして，夕暮れ時の弘前公園を歩いたこともある。

弘前市の前は，やはり，尾崎康弘氏のお世話で，八戸市の土を踏むことができた。新幹線はまだ青森県まで延びていなくて，八戸線の港町に降りて海を見て泊まったこともあった。

ワープロを前にしたまま，記憶をたぐると，本学会の年２回の発表会に係わってのことではあっても，話せば，話題が発表からはどんどん離れて行く。しかたがない。

ともあれ，わたしの本学会への入会は，森川さんから誘いの手紙をもらったことに始まる。記憶の上では，発表会には，いつも森川さんがおられて，学会事務に気を配られていた。新しい出席者がいると仲間に入るようにと誘われていた、その姿が思い浮かぶ。

ところで，森川さんについての思いのいくつかを綴ろうとワープロに向かったのではあるが，この原稿の読み手となる，今の人たちには，書き手のわたしは未知の旧い会員である。自分のことを記さないでは話の先が見えてこないであろう。

もっとも，わたしには，自分に過ぎた年月で，現在

Akita University

の心象を語ることしかできないのであるが。

名古屋市

数学教育史学会には，もう出ることはないと思っていたのに，昨年，案内を手にしたら，会場は弘前大学とある。開催地が弘前市と知って気持が動いた。それに、発表したい・紹介したいという話が手元にある。話題の種は，５月の連休明けに，付録に数学の「問題」が書いてあるからと従妹が送ってきた，中学時代の同級生が編んだという自費出版本である。その後も、本の内容に係わり、彼女のむかしを語る手紙が続いて，食べて寝るが日常の隠居の背中が押された。

取り出して読み始めた研究論文は，２０１０年に参加した東北和算研究交流会で発表のあったもので，私家版・付録の算額「問題」を取り上げている。論文の発表者は，わたしの高校時代の先生で，江戸時代の解き方を解説している。当時の解答の全文が残されているというのは非常に珍しいことではないかと思う。

従妹の手紙からネット検索したら，元の解読・解読者の寄贈資料が山形大学に「文庫」としてあることもわかった。従妹はわたしと一つ違い。

なお、徳川日本の解答者は北方の探検家である。彼は晩年に，長崎から江戸に出てきたシーボルトに，何度となく会いに行ったという。

「問題」と解答者について紹介するような話をした昨年の教育史学会，その弘前での宿には，もう一人の客がいた。神社の修復にかかわって宿泊中の漆職人である。漆器の修復や修繕の仕事でヨーロッパにも行き，シーボルト博物館の地にも滞在したという。

宿は，岩木山神社の真ん前で，宿の温泉の湯は，頭上の樋から、音立てて流れ落ちていた。

翌日の発表の後の懇親会は，お開きの前の退席になったが，弘前駅から新青森までＪＲ線に乗り，無事に新青森駅からの仙台行き最終の新幹線に乗り継ぐことができた。

そして，今年の発表会，場所は名古屋市と伝えられてから，何度となく行って，市の地下鉄に乗り，あちこち見物した年月が少しずつ想い出された。

事務連絡は，昨年の弘前の懇親会で隣席になった，三重大学の田中伸明さんである。

発表を申込んで締切り日を作れば，今年になって気付いた考えを整理することになるだろうと思った。申し込みでは，所属を「東北数学教育学会」と記したら，プログラムでは，「元宮城教育大学」とされた。なるほど，全体の体裁というものがある。それに倣い，発表資料には「元兵庫教育大・宮城教育大」と書き入れた。

資料の後半では，わが国の幾何教育について提言している。そこでは，日本の現行の教育内容を，西洋数学史におけるユークリッドの「原論」に照らし，批判的にというか，史的反省の気持ちで観ている。

「原論」については，わたしは，１０年間の兵庫教育大学・大学院のゼミで学生に課すことで学ぶことができた。そう考えて「元兵庫教育大」と入れたのであったが，発表でそれに触れることはなかった。

数学ではなく，教科教育の担当になったのは，平成４年に宮城教育大学に戻ってからで，野沢 茂氏の後任だった。森川さんから入会の誘いがあったのは，その後だったことになる。(野沢氏は停年の頃は体調を崩され，講義にも出ておられなかったようである。)

転勤した教室では最年長になり，当初，数学科でない人から「あなたが今，数学の教官のなかで一番仕事が少ないだろうから，」と言われて，推薦入試のメンバーにあてがわれたりした。

もっとも，教科教育だからと当てられた仕事はあまりなく，改組改変で情報数理コースが新設されてからは，ＯＲとか，線形計画法とか，毎回，勉強しながらの講義になった。一度は４年生のゼミを担当した。

本会では，多変量解析の因子分析を利用した研究発表が，わたしの入会当時にもあったのを思い出す。

講義をするからには，わたしも試そうとした。ゼミの学生に計算センターで計算してあげますという熱心な子がいたが，残念なことに，自分でデータを作ることまではなくて終わった。

さて，話を現在に戻す。名古屋の会では，講演と６本の研究発表があって，その一つに，片岡啓（関西学院大学・教職教育研究センター），明治末期算術の教育実習記録 ―和歌山県師範学校「生徒研究」より― というのがある。

片岡君は，大阪府の高校教師のとき兵庫教育大学の修士課程（教育方法）を修了している。和歌山大学に７年間勤務し，今年の春に定年を迎えたという。実習記録についての紹介は興味深く聞くことができた。

わたしの発表は，弘前でのそれに続き，新たに気付かされたことを加えている。それには，平山 諦先生の「和算史上の人々」の第２章，§２の記述が大きく働いている。初等的内容であり，多分，和算研究者は穿鑿（せんさく）しないようなことだと思うが，わたしには，漠然と考えていたことを補強する，大きい情報源となった。

それと直接係わるわけではないが，第２章の同じ箇所で，「和算家は角を利用しなかったから，」とか，「和

Akita University

算家は角の概念を全く使わずに,」という文言に出会う。

森川さんが,「和算には，角の概念がない」と言ったことがあった。どんな状況下での発言だったのかまでは覚えていないが，わたしには忘れられない謂いとなっていた。

森川さんの発言の発信元はここにある，と思った。

秋田市

亡くなられたと聞いて，何日かが過ぎた今も，秋田市の千秋公園の土手のベンチで本を読んでいた森川さんの姿が思い浮かぶ。分厚い小説のようで，もしかしたら，本の表紙を見せられたかもしれないが，黙って通り過ぎようとした気持を伴っていたから，わたしが本会に入って間もなく，おそくても停年の平成１４年よりは前だったであろう。

そのときとは別の年，やはり秋田での初夏研究会で，森川さんの泊まったホテルの近くで出会ったことがあった。どこのホテルだったかと気にして古い小冊子を開いたら，千秋会館というのがある。同じ所にわたしも泊まって朝に会ったのかな～とも考えたが，地図のホテルの場所に思い当たらない。

平成１６年のＫＫＲホテル一覧には，名前に覚えのある，秋田・泰山荘というのがある。公園に近いし，ホテルはここだったに違いない。

思えば，書籍の全国共済施設一覧がインターネット版になり，ＪＲ時刻表の旅館・ホテルの電話番号のページも使われなくなって久しい。

ともあれ，桜の木の下で森川さんが本を読んでいたのは，研究会の場が，千秋公園の外堀のなかにある建物だったときであろう。

ところで，千秋公園は，わたしには，藤田嗣治の絵に出合った場所でもある。美術館の壁いっぱいを埋める「秋田の行事」には，雪国に暮らす人の姿や祭りが描写されている。わたしの郷里にもあった光景である。後にその壁画を前にしたときも，最初に見たときの衝撃の気持がよみがえる。

竹橋の東京国立近代美術館で，戦争の画が見られるようになったのは，停年の平成１４年よりは前であろうが，そこにある太平洋戦争の記憶を刻む，ひときわ目立つ絵の作者の名は藤田嗣治であった。国民学校の体操場に，ある日，たくさん貼ってあったと覚えているものの，敗戦後は，絶えて見ることも聞くこともなかった戦争画である。

藤田の絵は，記憶の底に沈んだままの画のご本尊に違いない，と直観された。

それから何年かが過ぎて，同じ近代美術館で，藤田のものを含む戦争画を，現在の歴史観で解説を付して特別展示しているのを見ている。

戦争の時期の絵はないが，宮城県立美術館でも，藤田嗣治展があった。

そして，思いがけなくも，今月の名古屋市美術館の「ランス美術館展」で藤田，最晩年の絵を見ることになった。こういうのを僥倖というのであろう。

美術館展は，広島，熊本などでも開催され，名古屋が最後だと説明してあった。名古屋はランスの姉妹都市だという。

ドラクロアは，市民革命を戦う民衆を描いた。パリから帰国していた藤田は，アッツ島玉砕や，サイパン島で散った同胞を描いた。群衆をリアルに描ける最初の絵師であった。

藤田嗣治（レオナール・フジタ），１８８６ ～ １９６８．

寺子屋，珠算塾

今年の日本数学教育史学会では，国次太郎氏（元佐賀大学）の講演があった。たくさんの，いろいろな話のなかに，わたしが聞き耳を立てたところがあって，その箇所は，配布された原稿で確認できる。３．気になるテーマ（１）～（１２）とあるうちの（４）乗法九九について，である。

なお、講演は，内容を研究会誌に載せる予定で依頼されたようである。

「・・・。私自身は今も総九九は苦手で，例えば７×４を見たときは頭の中では四七二十八を使っている。」

この症例（病気ではないが）は，日本語の声音，リズム，文法からすれば，半九九が総九九よりは自然であることを訴えているように,わたしは拡大解釈する。

こと，算数に関しては国家による欧化政策が浸透して，とき既に遅く，指導要領による修復・復元は不可能になっているが，割り算九九（の呼び声）は，継承したかった教育文化遺産だったという主張に賛同するわたしには，その趣旨を，ことばの学習の面から支えてくれる貴重な症例・証言になっていると思われる。

もっとも、教育文化を言うのは近年のこと，というより，それを口にしたのは，初めてかもしれない。

九九についてあれこれ考えたのには，ある時期の，森川さんの発表に助けられている。

文化遺産というときの九九は，明治・大正にも，庶民の暮らしで使われていた「そろばん」とむすびつい

Akita University

ており，無形文化に例えるときは，今や，する人のいなくなった「割り算九九」による運算までも念頭においている。

十の合成・分割も単に暗記の対象ではなく，幼児・児童の発達心理上は，すでにそこに問題解決の思考があり，身体が記憶するものであると考えたい。

寺子屋の「５つ玉**そろばん**」は，その原始・素朴の思考過程で機能する道具になっていたと思う。

「１，２，３，・・・」と数字を書く前に，「いち，に，さん，・・・」と文字を読む前に，「ひとつ，ふたつ，みっつ，・・・」と物や事を，口や指を動かし，かぞえる作業がある。

だが，「珠算の復興を」と言って，説明してみても，今では，無形文化としてではなく，自分たちのやらされた「４つ玉ソロバン」のことに受け止められる。

本会の研究会で発表したときも，森川さんに「珠算の授業はきらいだった」と言われた。

わたしは，指が繰り上がりや繰り下がりの操作を覚えているから教室で習ったのは確かだが，きらいも好きもなかったように思う。

妹に話したら，教え方でも，習い方でもなく，教室の仲間同士で，助け合う学習体験のところで思い出すようだった。ということは，中学生になってからの体験も混じっている可能性がある。

妹は，わたしより５年ほど下で，ほぼ森川さんの年齢である。ソロバンの力は，新制中学卒の就職を有利にする時代になり始めていた頃だと思う。

一昨年，「珠算の復興を」と地元の新聞の持論欄に投稿したら（東北数学教育学会年報第４７号に転載），肩書きを抜いたのに筆者と気付き，「今では珠算塾は外国に進出しています」，「日本で改良・進化したソロバンは輸出されています」などと教えてくれる人がいた。

やはり，計算の道具として進化した「４つ玉ソロバン」のことに読まれて，無形文化を具現していた，明治・大正の教育具としての**そろばん**を想像する人はいなくなったようだ。

山形市

森川さんと初めて話しをしたのは，どこだったのか，もう覚えていない。

入会時の会長の佐伯卓也先生は，わたしが学生のときの幾何学講座の助手で，ただし，３年次の演習の担当は別の人であった。

本会に入ってからの研究発表によって，わたしは，佐伯先生に「習い始めた」ことになる。

ここでまた，自分のむかしのことになるが，播州の地の，兵庫教育大学の新設で，その教員選考には平林一栄先生（広島大学）が関係されたようである。

平林先生が本会の発表会に来られたことがあって，わたしは，仙台に戻ったことを伝える機会になった。

森川さんが案内されて，竹内芳男氏（山形大学）の仏前にお参りされた。当日は，竹内氏を回想する講演を，確か，氏が付属学校の校長時の，副校長がされた。

学会年報の目次を拾い読んだら，２０００年の号に，佐伯先生の巻頭言（竹内芳男先生を忍びて）がある。竹内氏が亡くなられたのは，平成１１年だった。

鉛筆の書き入れがあるから，読んだことがわかるが，追悼文のあったことまでは覚えていない。

その後，平林先生は，秋田大学での研究会でも講演されている。初夏研究会・年会の開催地一覧でみると，講演は，２０１０年の会であろう。

ところで，今年の数学教育史学会で，国次太郎氏に話しかけ，平林先生の晩年のことを尋ねたが，わたしは平林先生が亡くなられたと何で知ったのだろうか，いま考えると，わからない。

本会で，森川さんか，湊 三郎先生に教えられて知ったという可能性はある。

日数教（日本数学教育学会）の会誌で，茂木 勇先生の追悼記事は読んだことは覚えている。わたしの退会はその直後ぐらいになるのであろう。

平林先生が，思い出の中ではお元気なのは，別の記憶が重なっているからかもしれない。

「平林先生は，広島大学の博士論文を準備するゼミに出席しています。そこで，伊達文治さん（上越教育大学）にも会いました」と中西 隆君（広島大学大学院）から聞いて，いまも研究の第一線にいるのかと思い，今もが，いつの間にか，いつまでも，になっていたかもしれない。

中西 隆君には，今年の名古屋でも会った。

ここで，何かを確かめるかのように，「数学教育史研究」，第１，２，３号を見たら，第１号の発行は，２００１年，そして，編集委員長の平林先生は初代会長，・・　そうだった。

３年目からの会長が国次太郎氏。

学会は日数教の論文発表会の「歴史研究部会」から出発した，と「学会のあゆみ」に記してある。

歴史研究部会の第１回は，平成７年（１９９５）の，第２８回論文発表会。第１回の学会総会は，平成１２年１１月の鳴門教育大学で開催の第３３回論文発表会のとき。

Akita University

わたしの大学停年は，平成１４年で，２００２年の３月，と独り言つ。

想定外の長話になって師走の月も近くなった昨夜，平林先生の生年をネット検索で確かめようとしたら，戸田 清（１９０２～２００１）というのを目にした。

脈絡のない年寄り話しになりつつあるが，戸田 清の名は,旺文社のラジオ講座でわたしは知った。後年，平林先生の口から何度となく「私の先生・・・」と聞くことになる。

受験講座・数学のもう一人の先生は，田島一郎。この先生は，佐々木元太郎先生（滋賀大学・兵庫教育大学）の話に出てきた。

あのときから１５年ぐらい経って，佐伯先生が，研究発表の「“東京考へ方研究社”の数学教授法について」で，田島先生の本（岩波全書で復刊）について触れられた。

発表では，佐伯先生の若い頃の学習体験を基盤に，「自学自習用の数学書」について語っており，読み方によっては，数学の勉強についての時代の証言になっていると思う。

話は，今年の夏のことに戻る。８月最後の週末，山形市で，第１３回になるという全国和算研究大会が開催された。わたしも参加した。参加者名簿の和算関連所属学会等の欄には，東北数学教育学会と記した。

会田安明二百年記念祭を兼ねた大会である。
会田安明，１７４７～１８１７．

大会２日目の日曜日，大会終了後に，希望者は山形大学図書館に案内され，安明没後二百年の記念展示を見学。見学してから，伊藤朋幸さん（元宮城県立宮城一高）と２人で駅まで歩いた。停年になったばかりの伊藤さんとは大会会場になったホテルで同室だった。

山形大学から山形駅の方に歩くのは，大澤弘典さんから,「霞城公園の桜が見頃です」と教えられて歩いて以来だった。公園には，その後にも，何度か入っているが，大学から駅への道を歩いたことはなかった。

大学の構内に入ったのも，あの年以来だと思う。

街の中心部には，かなり馴染んでいる。会場が中心街の建物だった本学会の研究会に，駅前から何度となく歩いているからであろう。森川さんから教えられて，文翔館,その近くの人気の食堂,駅に近い蕎麦屋さん，その他と，知っている。

伊藤さんと歩くうちに，彼の娘さんが山形大学の音楽課程を卒業したと教えられた。大学在学中は，山形に車を運転して来ることが何度かあったという。

だが，中心市街地については，わたしの方が詳しいような気がした。

東京大空襲

ここで，本会の年報：２０１１，第４２号を取り出し，湊 三郎先生の労作「東北・北陸数学教育基礎的研究会の記録」のページを開く。

初夏研究会の第１回は山形県民会館講堂に於いて，１９９６年５月１９日(日)に開催されたこと，新たに動き出す本学会の事務局長は森川幾太郎，前年１２月４日の総会の協議で決まっていたこと,などがわかる。

それに，初夏研究会の名前に残された,「初夏」の研究会の歴史が１９７３年からの（年報）掲載論文等によって記録されている。

この労作には，研究会（例会，発表会）の会場，参加者の氏名も克明に記されてある。

そこに時代変化を読んだりしては筆が先に進まなくなる。中に踏み込まないように，手前で足踏みしたまま，わたしは，例会の場所・会場を読み，参加者の名前に目を走らせる。

目を止めた参加者のなかに，１９７８年，９．２３．の日付に，竹内芳男（山大）・・・松岡元久（山大），がある。お二人の名前は，１９８０年，２．３．にもある。

また，１９９１年，１２，１．の日付と，１９９２，１２．６．に，森川幾太郎（山大）・・・松岡元久（文教大），がある。

存知上げてはいても，わたしは，松岡氏，竹内氏，ともにお会いしたことはないと思う。だが，ここまで書き進む途中で，松岡元久氏の書かれた「和算と私」のことを想い出した。

１９９６年刊の「山形の和算」に＜特別寄稿＞としてある文章である。

刊行時に読んで，ずっと覚えていたことを，本文からの引用で次に記す。

「・・・，無残にも昭和２０年４月の東京大空襲は，この文化遺産を灰と化したのである。岡本（則録）が最後まで手元に残しておいた最も大切な和算資料が焼失してしまったのである。

たまたま　東京勤めで，前夜勤務隊（東京練馬にあった）から外出して家に立ち寄った私は，一旦隊に戻り,翌日ふたたび焼けたわが家にかけつけたのである。そのとき最初に私の口から出たことばは,「畜生！！」まったく涙も出なかった。」

松岡氏の父・文太郎の妻は，岡本則録（のりふみ）（１８４７～１９３１）の妹である。

Akita University

「和算と私」は，１．私の生い立ち，２．山形と最上流，３．関流四伝安島直円，４．山形大学時代の私，からなり，上に記したのは，１．の最後の部分である。

今回は，７ページある全文を一気に，しかも、新鮮に読んだ。いちいちが，心に沁みた。

読んだのは，先にこの稿に，今年は「会田安明二百年記念祭」と書き入れた後である。

驚くなかれ，「２．山形と最上流」のところに，「会田安明百五十年記念祭」のことが，にぎにぎしく記録されてある。そして，３．では，平山諦・松岡元久の「安島直円全集」にまつわる話が，そして，「４．山形大学時代の私」。

この「４.」から，断片的になるが，拾い読む。

「山形大学に着任以来，・・・。算数・数学に弱い子どもたちの心理とその指導法について，反応の率直なへき地の子どもたちを中心にして実験研究をしてきた。」

「・・・，大学の授業の方では，上記の両面（数学教育と数学史の研究）に関する内容に好んでふれる一方，卒業研究でもこれらの方面を主体としたものを多く取り上げた。」

この件を読みながら，わたしには，森川さんや，森川さんの教え子たちの研究発表が思い出された。森川さんの山形大学勤務は，松岡氏が大学を去ってからであろうが，学生教導の姿勢でどこか共通するものが感じられる。

一度だけであるが，森川さんの指導した学生たちの研究についてのわたしの質問に，森川さんは，不快の感を込めた忠言を発したことがあった。

いま思うに，教科の垣根を越えた，子どもたちが暮らす地域の基盤に立つ教導内容に着目して，そこを第一に考えて聴くことが，わたしにはできなかったのであろう。

ところで，「山形の和算」の＜特別寄稿＞には，松岡氏の「和算と私」の前に，もう一つの稿が載っている。平山 諦「最上徳内」，これも，読み返すことになった。

平山は次のように言う。

「大ていの徳内伝には『修学のため江戸に出て，本多利明より天文，地理，航海術を学ぶ』とある。あたかも徳内は本多より学んだことによって，蝦夷地探検が出来たかの印象を与える。私は大いに疑問に思う。反対に本多の蝦夷地開発の主張は，徳内の密談が原動力となった感が深い。」

密談の内容は，徳内の，禁じられていた蝦夷地行きを指し，幕府の蝦夷地検分が一段落した頃になって，会田安明が「自在漫録」に書いた（１８１７）。

平山は，「自在漫録」を読み，さらに，加藤隆瑞著「最上徳内；修養訓話」（明治４０年）というのを見ることができて，徳内は，２５歳の頃（１７７９），密かに択捉島に渡ったことは確かである，と述べている。

前に通読したときは，平山のこの発見の重みをわたしは感得できなかった。それに気付かせてくれたのは，この原稿作成の作業である。

わたしが徳内について書いて，１１月１日に発行された研究会誌で発表したものの**あとがき**に，次のようなドナルド・キーンの文言を入れたときから，一ヶ月しか経っていない。（鳴門教育大学・学校数学研究，２０１７年 秋号）。

「本多利明の生涯のなかで，もっとも謎めいた点は，１７８５年（天明五）幕府が派遣した北方探検隊に，なぜかれが加わらなかったのか，ということである。」

平山先生の研究は，キーンさんが言う「謎めいた点」を解明してくれていたではないか。

それから，ここまで読んだ方はもう気付かれているであろうが，原稿の初めのところで，「徳川日本の解答者，北方の探検家」と述べたのは，最上徳内である。

この原稿では，名前を記して話すようなことはない，と思っていたのであるが，思いがけないことに，予想もしなかった勉強をすることになった。かなしいはずの作業の果てに，うれしい発見がひそんでいて，それを書く場に利用させてもらうことになった。

不明の目を開いてくれたのは，森川さんを想い出す，隠居の独り仕事である。

（森川さんがお元気でいても，徳内について話すことなどはなかっただろうが，わたしはここに至って，彼岸の森川さんに，自分が此岸にいるのを忘れて話しかけているような心情になっている。）

本多利明（１７４３～１８２０），　最上徳内（１７５５～１８３６）

福島市

かなり前の研究発表を通じての推測だったかもしれないが，森川さんは，国立国会図書館をよく利用されていたようである。その記憶の心象に導かれて、数年前、わたしは国会議事堂前からそこへと永田町を歩いた。昼時，図書館の上階にある食堂に座ったら，窓からのこの景色は，森川さんも見ていたと思った。

本学会の研究会の外で，わたしは森川さんに会うこ

Akita University

とはなかったが，一度だけ，日数教の，全国算数・数学教育研究（長野）大会の分科会で一緒になった。助言者の控え室が同じだったから，ともに，高校部会だったのだろう。

その折に，森川さんは出身地が長野県だと話された。長野市から近い土地だったような気がするが・・・わたしには長野市が初めての信州だった時のこと。

そういえば，研究発表の内容にかかわって，若い人たちに向かって話すように，野麦峠，女工哀史，富岡製糸所，など，信濃の地理を説明されることがあった。

ここにも，わたしの間違えた思い込みの混入している可能性があるが。

というのも，長野大会の翌年は鹿児島大会で，それが，わたしが出席した最後の大会だと思っていたが，念のために，ホームページの開催地一覧を見たら，驚いたことに，鹿児島が平成１６年（２００４）で，長野が１７年（２００５）と，順番が逆である。（鹿児島大会は，九州新幹線の新八代－鹿児島中央間が開業した年だった。）

鹿児島では，兵庫教育大学の大学院に来た教師諸君が，福森信夫先生とわたしの２人のために集まってくれた。そのなかの高校教師の一人に長野でも会っているので，「翌年の鹿児島大会の準備・下見のために」と，いつの頃からか勝手に思い込んでいた気味がある。

ともあれ，長野大会が助言者の最後の年になるようで，日数教を退会するのは，その直後だったのか。

夏の大会から帰る新幹線が仙台駅に近付くと，仙台七夕祭り，その前夜祭の花火が見えたことが２回ぐらいあったのを思い出す。

日数教は退会したが，本会を退会することはなく，発表会への出席は続けていた。

だが，わたしの停年から、平成２４年の３月で１０年になる。そのときまでには，教育と名のつくものからは事実上，手を引こうと心に決めていたと思う。

ところが，そうすることもなく，平成２９年の今年がある。

平成２３年３月１１日に，東北大震災があった。

その夏には，飯坂温泉での東北和算研究交流会に参加した。２４年の夏には，仙台で全国和算研究大会というのがあったが，小田原の親戚に不幸があって，直前になって出席を取り消した。

２５年の夏になって，全国和算研究（山梨）大会に参加した。わたしには初めての大会になった。会場の地は石和温泉で、そろばんについての私見を発表した。

震災の年の本会の初夏研究会では，雑談中の開始前の部屋に，「震災の話をしているのですか・・・」と言って，森川さんが入ってきたのを思い出す。

震災後の，福島での最初の研究会は，森川さんが言うには，「福島駅より東の海寄りは放射線量が多いからと，栗原秀幸さんは，発表会場にするのを敬遠した・・・」とのこと。

研究会場が福島市になったなかで，わたしには印象強く，忘れられないのは，建物に入ったら，窓の外に大きな川の流れがあり，右から左に勢いよく流れ，荒らぶる波が目の高さに迫らんばかり，近くに初めて見る阿武隈川であった。

もう一度，同じ建物が会場になっているが，前の高さの水はなかった。

震災前を記録する本学会の年報に，建物の名が記されてあるはずだと思ったが，うまく探せない。先に，湊先生の労作と記したのを開いたら，福島大学職員会館というのがある。これに違いない。わたしが入会する前に，そこが３回，会場になっている。

森川さん，松岡氏が出席の，１９９１年，１２，１．の日付の会場がそこになっている。

むすびに，大正生まれの人たち

震災で，仙台駅の手前で止まった新幹線が，まだ６階の居室から見えたままの夜，大学の同級生の亡くなったことを伝える電話があった。彼の住まいは常磐線の我孫子市，バスで東京に往復できるとは，奥さんからの電話を受けているときは，想像すらできなかった。

墓は，郷里の白石市にある。奥さんが来るのというのに同行し，今年，２度目の墓参りをした。手帳を見たら，１０月１３日だった。宮城蔵王が眺められる墓地である。（あの墓参りの日から一週間もしない日に，森川さんは旅立たれた。）

菩提寺は，新幹線の白石駅からはかなり歩くことになるが，市街地に位置し，東北本線の白石駅からは直ぐのところにある。再び，住職夫妻とお会いすることになった。

前回は，白石から見える蔵王連峰の山の名は不忘山と教えられ，そこに，１９４５年３月１０日，米軍のＢ２９が３機墜落したという話を聞いた。死亡した米将兵３４人，その山頂付近に「不防の碑」を建立する事業に，夫妻の父親が深くかかわったという。七ケ宿町の山麓の，不忘の碑と墜落地点を望む場所には慰霊碑を据えた「不防平和記念公園」がある。

米軍の空襲を受けた都市は山形県にはなかったみたいで，めずらしいらしいと，住職に言ったら，不忘

Akita University

山にぶつかったＢ２９は，山形の空襲に向かっていたのだろうと応えられた。

３月１０日の夜は，東京の最初の大規模な無差別空襲のあった日である。

話は，戦中の学童疎開のことに移り，寺に集団疎開してきた学童たちのこと，その食料調達に苦労したこと，と続いた。母親から聞いた話ですと言われた。

山形県内の盆地に生まれ育ったわたしも疎開してきた子と席を並べたのを覚えている。敗戦後の配給制度の混乱にも覚えがあるが，大人の苦心，当時の親の心中のところは子供にはわからない。親に尋ねることもなく終わった。

大学を出て最初の職場で，また，兵庫の大学で，同年や少し上の人から，宮城県に疎開していたと話され，思い出を聞いたことがあった。

今回，白石の戦争末期の状況を聞いてから，東京から疎開するには，奥羽本線より東北本線の方が移動の便がよかったのではないかと思った。

白石は伊達藩の城があったところで，宮城県の市である。白石から福島までは遠い，と思っていたが，違った。JR 東北本線では，白石からは仙台までの方が，時間がかかる。

さて，追悼の意をワープロに打ち込むのも苦行になって，途中から，そうすれば少しは楽になるかと，題目に「思い出されるままに」と足した。難行ではなくなったものの，思い出しには確認の準備がなく，本文まで長くしてしまったようである。

とうとう，師走の月を迎えてしまった。

新聞に，東北新幹線の盛岡～八戸間が，１２月１日に開業１５周年を迎えたとある。

２００２年，平成１４年の開業だった。

開業する前に，三戸の手前の，金田一温泉に降りて，翌朝早く，八戸に向かったことがあった。駅までの道で，温泉街へと一人歩いてくる婦人の姿がずっと先から見えていて，出会ったところで朝の挨拶を交わした。懐かしい光景に思い出される。

あれからは，新幹線開通後の交通関連の変化について，八戸駅の賑わいについて，尾崎康弘氏から，度々，いろいろとお聞きすることになった。

そういえば，八戸行きとむすびついての，森川さんは思い浮かばない。どうしてだろう。

どんどん忘れてゆくなかで，くりかえし思い出し，忘れないこともあるのに。

ところで，上で，疎開してきた児と記した。「疎開」はクラスへの転校生を指して使うことばだった。

何の折か，茂木 勇先生は，「疎開」と聞いてすぐ，「空襲で延焼するのを防ぐため，密集している家々を壊し，空き地を作り，疎らにした」それが疎開だ，と説明された。

「この国の空」という一昨年の映画に，「建物を壊しに行く」というセリフがあって，国策としての疎開が身近にあった日々が感じられた。原作者の高井有一の死亡記事は，１年前に目にしている。

今年，仙台市の図書館で，「山田風太郎エッセイ集成・昭和前期の青春」という本が目に入って，借りてきて読んだら，「学徒動員で建物疎開の命令を受けて，新宿附近の建物をこわしてまわったこともある」とあった。

読んだわけではないが，山田風太郎の「戦中派不戦日記」とか「戦中派虫けら日記」については，ドナルド・キーンさんが書いていることも知った。

名前を書かないでいた，わたしの高校の先生は伊藤幸男，和算の知識も「山形の和算」も，提供は幸男先生である。先生が若いときから読んだ作家として，山田風太郎の名を手紙に記してこられることがあったが，その事情がやっと飲み込めたように思う。

わたしは，貸し本屋の「くの一忍法帖」のようなのを読んだことがあるぐらいだった。

幸男先生，茂木先生，佐々木元太郎先生は，東京高等師範の同級生，山田風太郎もほぼ同じ年齢の，大正生まれである。幸男先生の生まれは，大震災のあった大正１２年。

茂木 勇先生は，（筑波大学の）数学教育の仕事は，これからは，「能田（伸彦）君がやってくれる」と言われたことがあった。停年後に，文教大学の教壇に立たれ，その一年生への講義を熱く語られたときであろう。後，文教大学学長。

あるときは，微分幾何学の師の矢野健太郎氏についての，晩年の今，をお聞きした。

矢野健太郎の生年は明治４５年，平山 諦は、明治３７年，平山の師の藤原松三郎は，明治１４年。藤原は，帝国大学創設のための欧州留学組の一員である。

余事になるが，平山の子息は，わたしが大学の理学日に入学したとき同じクラスだった。

森川幾太郎さんのご両親は，ともに大正のお生まれではないだろうか。

（**追記：**今年の夏の８月１２日に放映の NHK スペシャル「本土空襲　全記録」に，BS1 の年末・再放送で出会うことができた。）